

福岡女学院大学紀要 人文学部編 第24号
2014年3月

『コンテムツスムンヂ』
卷一、二に見る「大切」

大 島 一 利

『コンテムツスムンヂ』 巻一、二に見る「大切」

大 島 一 利

はじめに

私の研究主題はキリシタン時代の秘跡理解であり、その研究を通してキリシタン時代における実際の礼拝行為と典礼理解を解明したいと願っている。それは日本人によるキリスト教受容の内容と過程を、具体的な実践レベルにおいてとらえてみたいというものである。そこで考察対象を当時のキリシタン版に定め、当時の信徒層に広く読まれたものから『コンテムツスムンヂ』を選び、前々回のキリスト教史学会西日本部会にて『『コンテムツスムンヂ』における悔悛の教え』と題して発表を行なった。その際に考察した結果とその過程が今回の発表に繋がっている。それは発表の結びとしてまとめた「深い内容について十分に咀嚼して原著の意向を伝達していること」、また「自由な翻訳態度による読み替えの豊かさ」に基づくものである。¹そこで今回はキリシタン用語の中でも最も知られている「大切」に注目し、前回と同様に翻訳用語の逆引きによる検索結果に基づいて比較対照を行なってみたい。「大切」と翻訳されている用語がどのような原語であるのか、そこに統一性や一定の規則があるのか、またそこからキリシタン時代における信仰理解がどのように見出されるのか、ということを確認してみたい。

¹ 大島一利『『コンテムツスムンヂ』における悔悛の教え』、福岡女学院大学紀要・人文学部編第22号、2012年3月、169頁。また『コンテムツスムンヂ』の史料的価値や位置づけ、更に研究史についてはこちらを参照。

ただ今回は全四巻に分けられている『コンテムツスムンヂ』のうち、巻一、巻二を対象とするに留める。検索した結果、後半部分のある章においてかなりの集中が見られるため、分けて考察してみたいというのが理由である。いずれ総合的に考察することを目的としつつ、今回は前半部分のみの整理と分析を行なってみたい。

1. 「大切」について

キリシタン時代のキリスト教用語の翻訳に関して、とりわけこの「大切」という用語を見出し、かつ豊かに利用したことはつとに知られている。² 国語学の立場からこの『コンテムツスムンヂ』を研究された松岡洸司氏は、この「大切」という用語の意義と使用状況を次のようにまとめている。

「大切 taixet

愛。Taicetni moyuru (大切に燃ゆる) 愛に燃える。Taixetuo tsucusu (大切を尽くす)この上なく愛する、あるいは深い愛と厚遇を示す。Taixetni zonzuru/vomo (大切に存ずるまたは思ふ) 愛する。

大辞林では、『大いに切(せま)る』『切迫する』の意から、①重要であるさま。肝要。大事。『-な点、-な役目』②価値が高いさま。貴重。大事。『-な品』『-な命』③丁寧に扱うさま。大事。『おからだを-になさって下さい』『-に使う』④切迫するさま。緊急を要するさま。『-なる事ありて、夜を昼にて上れば』(今昔一六)

(解釈) 現代語の『大切』は肝要・重要の意味をもつと同時に、価値が高いさまの意でも用いられている。日葡辞書であるいはキリシタン書で使った『大切』は愛の意味であり、『大切をつくす、大切に思ふ』も愛する意で、この時代に使用されたキリスト教の用語の一つである。³

² 漆崎正人「たいせつ(大切)考-『天草版伊曾保物語』の用例をめぐって-、藤女子大学紀要、2002年3月、参照。

一般にひろく「御大切=キリスト教的愛」、あるいは「大切=神的愛」とみなされている傾向にあると思われるが、『コンテムツスムンヂ』はこの用語をどのような意義で、またどのような内容と共に語られているのかを以下において確かめてみたい。

2. 『コンテムツスムンヂ』における「大切」

2.1. 方法論について

前回に続き、翻訳用語の逆引きによる検索結果に基づいて比較対照を行なってみる。その理由とその方法による制限もまた前回と同様であるが、改めて説明を加える。それは「ラテン語原文からではなく、翻訳されたものからの逆引きである。それは本論がキリシタン時代に翻訳し紹介された秘蹟理解に限定した考察に集中するためであり、全体的な理解のためには更なる比較検討が必要であることを痛切に感じている。またキリシタン時代の翻訳上の問題からも本書校訂版とラテン語版、更に当時の流布本であるスペイン語版も確認する必要性に関しても同様に思う。この原著の問題に関して小島氏は『コンテムツスムンヂの訳出にあたり、L. グラナダのスペイン語訳本なども参照された可能性はあるが、主としてラテン語原典(どの版を用いたか、の特定にはまだ至らないが)を用いたと思われる。原典のラテン語本は1本ではなく、複数の原典をもとに翻訳されたであろうこと。それは少なくともラテン語版とスペイン語版の双方を含んでいたであろうこと、である。いずれにしても、研究はまだ緒についたばかりである』とされている。原著問題に関する制約はあるが、このような限定的抽出と論証の中からも、当時の翻訳姿勢や秘蹟理解の特徴は十分に把握できることを以下において論証してみたい」ということである。⁴ 対象を悔悛から、「大切」に限定する事だけで方

³ 松岡洸司『コンテムツ・ムンヂ研究－翻訳における語彙の考察－』、国語学研究②、ゆまに書房、1993年、79頁。

⁴ 大島一利、前掲論文、161-162頁。なお小島氏からの引用は、小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究研究篇』、武蔵野書院、2009年、58頁による。

法は変えずに検証を行なってみる。ただ国語学的に詳細な分析を加える事が目的ではないこと、更に前回は国字本と現代訳をも並行比較したことにより論証が煩雑となったことから、今回は尾原悟氏編の『コンテムツスムンヂ』（教文館、2002年。以下校訂版と称する）と『キリストにならいて』ラテン語流布本 De Imitatione Christi. Ratisbonae 版, 1923. とを用いるに留める。⁵

2.2. 本文比較

『コンテムツスムンヂ』巻一、巻二に見られる「大切」を確かめてみる。読み解きに必要な文脈を抜きとってみると以下の通りとなる。校訂版を先に掲げ、その横あるいは下に原典たるラテン語版 De Imitatione Christi の該当箇所を紹介し、下線部において使用用語を抜き出してみる。なおタイトル数字はラテン語版の巻・章・項目番号である。

I - 1 デウスのご大切とその合力なくんば

sine caritate Dei et gratia⁶

デウスご一体を大切に思ひ praeter amare Deum⁷

I - 2 カリダアデと言へるデウスのご大切なくんば

et non essem in caritate⁸

I - 3 終わりなきご大切を以て

in caritate pertetua⁹

深き大切を持つ人

qui magnam habet caritatem¹⁰

I - 8 諸人に対して大切あることは順義なりと雖も

⁵ 以下、引用の際における校訂版とは尾原悟編『コンテムツスムンヂ』、教文館、2002年を指し、その頁を注記する。また原本・原典・原文・ラテン語版とは小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究資料篇』、武蔵野書院、2009年を指し、その頁を注記する。

⁶ 校訂版16頁、ラテン語版 I - 1 - 10、456頁。

⁷ 校訂版16頁、ラテン語版 I - 1 - 11、456頁。

⁸ 校訂版17頁、ラテン語版 I - 2 - 4、458頁。

⁹ 校訂版18頁、ラテン語版 I - 3 - 10、462頁。

¹⁰ 校訂版20頁、ラテン語版 I - 3 - 34、466頁。

Caritas habenda est ad omnes¹¹

I -10 わが大切に思ひ、好き好むことと

multum diligimus vel cupimus¹²

I -14 その故は身を思ふ大切によつて

propter privatum amorem¹³

I -15 カリダアデと言へるデウスのご大切に引かれて致す所作のこと

De operibus ex caritate factis¹⁴

何たる人の大切に引かれても pro nullius hominis dilectione¹⁵

深き大切ある者 qui multum diligit¹⁶

骨肉に当る大切をカリダアデと思ふこと多し

Saepe videtur esse caritas, et est magis carnalitas¹⁷

骨肉の大切と

該当箇所は指示詞もなく、文面を重ねて訳したもの。¹⁸

I -18 大切、堪忍を本として給ふなり

in caritate et patientia ambulabant¹⁹

I -21 汝の大切に思ふ程の人々よりも

prae omnibus tibi dilectis²⁰

I -22 哀れなるかなこの憂身の命を大切に思ふこと！

qui diligunt hanc miseram et corruptibilem vitam²¹

¹¹ 校訂版24頁、ラテン語版 I - 8 - 7、474頁。

¹² 校訂版25頁、ラテン語版 I -10- 6、476頁。

¹³ 校訂版31頁、ラテン語版 I -14- 3、488頁。

¹⁴ 校訂版32頁、ラテン語版 I -15、490頁。章のタイトル。

¹⁵ 校訂版32頁、ラテン語版 I -15- 1、490頁。

¹⁶ 校訂版32頁、ラテン語版 I -15- 6、490頁。

¹⁷ 校訂版32頁、ラテン語版 I -15- 9、490頁。

¹⁸ 校訂版32頁、ラテン語版 I -15- 9、490頁。

¹⁹ 校訂版36頁、ラテン語版 I -18-20、498頁。

²⁰ 校訂版42頁、ラテン語版 I -21-12、512頁。

²¹ 校訂版45頁、ラテン語版 I -22-14、516頁。

²² 校訂版49頁、ラテン語版 I -24- 9、528頁。

- I -24 妄りなる大切によつて per inordinatum amorem²²
 畢竟デウスを大切に思ひ praeter amare Deum²³
 デウスを無二無三にご大切に思ひ奉る人は
 Qui enim Deum ex toto corde amat²⁴
 達したる大切ある人 perfectus amor²⁵
 未だデウスのご大切に対して悪を捨てねば
 si necdum amor a malo te revocat²⁶
- II - 1 汝の恐れ奉るべきも、大切に思ひ奉るべきもこの君なるべし
 ipse sit timor tuus et amor tuus²⁷
 燃え立ち給ふご大切 ardente amore²⁸
 ゼズスのご大切は amor Jesu²⁹
- II - 2 謙る者を大切に思召し humilem diligit³⁰
- II - 3 実の謙りと、大切は vera caritate et humilitate³¹
 わが身に等しき者をば大切に思ひ
 secum sentientes magis diligit³²
- II - 5 デウスを大切に存じ奉る アニマは
Amans Deum anima³³
- II - 6 デウスのご大切ある人の為には難儀のうちにて楽しむことも難き
 ことにあらず

²³ 校訂版51頁、ラテン語版 I -24-43、532頁。

²⁴ 校訂版51頁、ラテン語版 I -24-44、532頁。

²⁵ 校訂版51頁、ラテン語版 I -24-44、532頁。

²⁶ 校訂版51頁、ラテン語版 I -24-46、532頁。

²⁷ 校訂版57頁、ラテン語版 II - 1 -14、544頁。

²⁸ 校訂版58頁、ラテン語版 II - 1 -29、546頁。

²⁹ 校訂版58頁、ラテン語版 II - 1 -29、546頁。

³⁰ 校訂版59頁、ラテン語版 II - 2 - 9、548頁。

³¹ 校訂版60頁、ラテン語版 II - 3 -12、550頁。

³² 校訂版60頁、ラテン語版 II - 3 -13、550頁。

³³ 校訂版63頁、ラテン語版 II - 5 -18、556頁。

³⁴ 校訂版64頁、ラテン語版 II - 6 - 9、558頁。

Gloriari in tribulatione non est grave amanti³⁴

II - 7 万事に越えてゼズキリシトを思ひ奉る大切のこと

De amore Jesu super omnia³⁵

ゼズキリシトを大切に思ひ奉ること

amare Jesu m³⁶

このご大切の為に一方の大切を差し捨つべきこと肝用なり

Oportet dilectum pro dilecto relinquere³⁷

ご作の物の大切は謀ることあり

Dilectio creaturae³⁸

キリシトのご大切は二心なく dilectio Jesu³⁹

御主を大切に思ひ、親しみ奉れ

Illum dilige et amicum tibi retine⁴⁰

ご作の物の妄りなる大切を払ひ除くるに於いては

ab omni creatura evacuae⁴¹

II - 8 ゼズキリシト御一人を別きてご大切に思ひ奉るべし

Jesus solus dilectus specialis⁴²

万民をばゼズキリシトに対し奉りて大切に思ひ

Diligantur omnes propter Jesum⁴³

ゼズキリシトは他に殊に大切に思はれ給ふべき御主なり

Solus Jesus Christus singulariter est amandus⁴⁴

知音をも敵をもゼズキリシトに対し奉り、ゼズキリシトともに大

³⁵ 校訂版65頁、ラテン語版II-7、560頁。章のタイトル。

³⁶ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-1、560頁。

³⁷ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-2、560頁。

³⁸ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-3、560頁。

³⁹ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-3、560頁。

⁴⁰ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-5、560頁。

⁴¹ 校訂版65頁、ラテン語版II-7-9、560頁。

⁴² 校訂版67頁、ラテン語版II-8-21、564頁。

⁴³ 校訂版67頁、ラテン語版II-8-22、564頁。

⁴⁴ 校訂版67頁、ラテン語版II-8-23、564頁。

切に思へ、各々皆ゼズキリシトを見知り奉りてそれをご大切に思
ひたてまつるやうに彼等が為に祈念すべきものなり。

Propter ipsum et in ipso tam amici quam inimici tibi sint cari;
et pro omnibus his exorandus est, ut omnes ipsum cognoscant
et diligant.⁴⁵

我一人讃められ、大切に思はれたく思うこと勿れ

Nunquam cupias singulariter laudari vel amari⁴⁶

人の大切に心の隙を取らるること勿れ

neque tu cum alicujus occuperis amore⁴⁷

- II - 9 剰深く大切に思ひ給ふ maxime diligebat⁴⁸
キリシトのご大切によつて pro amore Christi⁴⁹
所詮デウスのご大切を以て人間の大切に勝ち給ひ

Amore igitur Creatoris amorem hominis superavit⁵⁰

デウスのご大切に対して pro amore Dei⁵¹

- II - 10 大切に思ふこと皆デウスのご内証に叶ふにあらず

nec omne desiderium purum, nec omne carum Deo gratum⁵²

- II - 11 キリシトの御クルスを大切に思ひ奉る者如何にも少なきこと

De paucitate amatorum Crucis Jesu⁵³

敵対ふことのなき時ゼズスを大切に思ひ奉る者は多きなり

Multi Jesum diligunt, quamdiu adversa non contingunt⁵⁴

さても私の大切にを交へぬ清浄なるゼズキリシトへのご大切は如何

⁴⁵ 校訂版67頁、ラテン語版Ⅱ-8-24、564頁。

⁴⁶ 校訂版67頁、ラテン語版Ⅱ-8-25、564頁。

⁴⁷ 校訂版68頁、ラテン語版Ⅱ-8-26、564頁。

⁴⁸ 校訂版69頁、ラテン語版Ⅱ-9-7、568頁。

⁴⁹ 校訂版69頁、ラテン語版Ⅱ-9-7、568頁。

⁵⁰ 校訂版69頁、ラテン語版Ⅱ-9-8、568頁。

⁵¹ 校訂版69頁、ラテン語版Ⅱ-9-9、568頁。

⁵² 校訂版72頁、ラテン語版Ⅱ-10-12、574頁。

⁵³ 校訂版74頁、ラテン語版Ⅱ-11、576頁。章のタイトル。

⁵⁴ 校訂版74頁、ラテン語版Ⅱ-11-7、576頁。

ばかりの精力がある

O quantum potest amor Jesu purus, nullo proprio commodo vel
amore permixtus⁵⁵

わが身を思ふ大切を少しも残さず

nihilque de privato amore retineat⁵⁶

II-12 デウスのご大切重なるに応じて

magis ex amore crescit⁵⁷

ゼズキリシトの御クルスに値遇し、大切に思ひ奉る心

amorem conformitatis crucis Christi⁵⁸

ゼズキリシトのご大切によつて難儀に遭ふことを甘味と覚ゆる位
に至るに於いては

quod tribulatio tibi dulcis est et sapit pro Christo

該当するラテン語なし。⁵⁹

ゼズスを大切に思ひ奉り

Jesum diligere⁶⁰

2.3. 本文比較に基づく使用用語一覧

次に上記の使用例を該当する原語とその訳出とを比較対象するために整理し、一覧として掲げる。なお分析のために「善き」、「悪しき」という項目を設けているが、これについては後述する。

⁵⁵ 校訂版74頁、ラテン語版Ⅱ-11-12、578頁。

⁵⁶ 校訂版75頁、ラテン語版Ⅱ-11-22、578頁。

⁵⁷ 校訂版78頁、ラテン語版Ⅱ-12-31、584頁。

⁵⁸ 校訂版78頁、ラテン語版Ⅱ-12-35、584頁。

⁵⁹ 校訂版78頁、ラテン語版Ⅱ-12-47、586頁。

⁶⁰ 校訂版78頁、ラテン語版Ⅱ-12-47、586頁。

No.	ラテン語	訳出	善き	悪しき	No.	ラテン語	訳出	善き	悪しき
I - 1	caritate	ご大切	○		II - 7	amore	思ひ奉る大切	○	
I - 1	amare	大切に思ひ	○		II - 7	amare	大切に思ひ奉ること	○	
I - 2	caritate	カリダアデ、 ご大切	○		II - 7	dilectum	ご大切	○	
I - 3	caritate	ご大切	○		II - 7	dilecto	大切		○
I - 3	caritatem	大切	○		II - 7	dilectio	大切		○
I - 8	caritas	大切		○	II - 7	dilectio	ご大切	○	
I - 10	diligimus	大切に思ひ		○	II - 7	dilige	大切に思ひ	○	
I - 14	amorem	大切		○	II - 7	注2	ご作の物の妄りなる 大切		○
I - 15	caritate	カリダアデ、 ご大切	○		II - 8	dilectus	ご大切に思ひ奉る	○	
I - 15	dilectione	大切		○	II - 8	diligantur	大切に思ひ	○	
I - 15	diligit	大切ある	○		II - 8	amandus	大切に思はれ給ふべき	○	
I - 15	carnalitas	骨肉に当る大切		○	II - 8	sint cari	大切に思へ	○	
I - 15	caritas	カリダアデ	○		II - 8	diligant	ご大切に思ひ奉る	○	
I - 15	注1	骨肉の大切		○	II - 8	amari	大切に思はれたく 思うこと		○
I - 18	caritate	大切	○		II - 8	amore	大切		○
I - 21	dilectis	大切に思ふ		○	II - 9	diligebat	大切に思ひ給ふ	○	
I - 22	diligunt	大切に思ふ		○	II - 9	amore	ご大切	○	
I - 24	amorem	大切		○	II - 9	amore	ご大切	○	
I - 24	amare	大切に思ひ	○		II - 9	amorem	大切		○
I - 24	amat	ご大切に思ひ奉る	○		II - 9	amore	ご大切	○	
I - 24	amor	大切ある人	○		II - 10	desiderium	大切に思ふこと		○
I - 24	amor	デウスのご大切	○		II - 11	amatorum	大切に思ひ奉る者	○	
II - 1	amor	大切に思ひ奉る	○		II - 11	diligunt	大切に思ひ奉る者	○	
II - 1	amore	ご大切	○		II - 11	amore	大切		○
II - 1	amor	ご大切	○		II - 11	amor	ご大切	○	
II - 2	diligit	大切に思召し	○		II - 11	amore	大切		○
II - 3	caritate	大切	○		II - 12	amore	ご大切	○	
II - 3	diligit	大切に思ひ		○	II - 12	amorem	大切に思ひ奉る心	○	
II - 5	amans	大切に存じ奉る	○		II - 12	注3	ご大切	○	
II - 6	amanti	ご大切ある人	○		II - 12	diligere	大切に思ひ奉り	○	

注1 指示詞等はないが、文脈上重複して用いている

注2 該当する箇所は omni creatura、意識である

注3 該当する箇所は pro Christo、意識である

3. 分析

以上の引用と一覧とから、以下に三つに区分してその特徴を整理してみる。

3. 1. 原語との比較による用語不統一の問題

引用と一覧から明らかなように、特定のある原語だけが「大切」と翻訳されているのではないという事が分かる。そこでキリシタン時代の辞書である『羅葡日対訳辞書』とも比較すべく、一部の意識を除く原語にあたってみると次のようになる。「」内は斜体表記の日本語発音部分を読み替えたものである。

Amo, as. *Taixetni uomo*. 「大切に思う」 Amor, oris. *Taixet, uoioi*. 「大切、思い」

Caritas, atis. *Tarauazaru coto, mono suqunaqi coto, cogiqinaru coto*.

「足らわざること、もの少なきこと、高直なること」

Carnalitas なし

Carus,a,um.Res accepta,grata. *Taixet naru mono, qini aitaru mono*. – Res magni pretii: *nenō tacaqi mono, cogiqi naru mono, atai tacaqi mono*.

「大切なるもの、気に合いたるもの、値の高きもの、高直なるもの、値高きもの」

Desiderium, ii. Nozomi, natcucuxisa, nocori uouoqi coto. 「望み、懐くしさ、残り多きこと」

Diligo, is, exi, ectum. Amare. *Taixetni uomo., vel vomo* 「大切に思う、思う」

Dilectio なし⁶¹

『コンテムツスムンヂ』は『羅葡日対訳辞書』を待たずに、また更にいえば天正遣欧少年使節の帰国に伴う印刷機の輸入をも待たずに翻訳が進められていたので、相関関係を見出すことは難しい。しかしここにまとめてみた辞書の定義とは異なるものの、実に適切な翻訳がほどこされているということは強調しておきたい。すなわち、辞書そのものがない中で、その定義を超え

⁶¹ 島 正三編『羅葡日対訳辞書検案』、文化書房博文社刊、1973年より。それぞれ上より47頁、48頁、107頁、108頁、206頁、216頁。

た訳出が多様になされているということである。それは字義への拘泥ではなく、文意の中から誰もが汲み取りうるように、「大切」と置き換えるという方法であり、その方法を取り得る信仰理解があったということである。それは上記の抽出できる語群のほかに、omni creatura から「ご作の物の妄りなる大切」と、また pro Christo から「ゼズキリシトのご大切によつて」と、読み替えや補足によって文意を伝えようとしたことから言える。このようにして「大切」と訳出されているものの原語には多様な形があり、辞書の即応性とは無縁のものであることが分かる。

しかしそのような多様な訳出の傾向を留めつつも、一覧からは主要な系統として三つをあげることができる。それをアルファベット順にすれば、Amo 系、Caritas 系、Diligo 系となる。次にこの三系統の使用状況を確認してみよう。

3.2. 「善き大切」と「悪しき大切」

まず一覧から指摘できることは、Caritas 系が巻一の前半部分に集中しているとはいえ、概ね原語との対応でいえば、分散利用されているということである。ある場所である系統を集中的に採用して訳出しているわけではなく、ここでも文意の尊重が第一義とされていることが指摘できる。

ただし Caritas 系に関してのみ言及すれば、原語音出によるキリシタン時代の用語と化している事をおさえておかなければならない。それは松岡洸司氏によれば、『『カリダアデ』のように、外来語のみで表記しているものと、訳語として『大切・御大切』と訳出したものと、『カリダアデと云えるデウスの御大切』という句で訳出する場合もある。この句訳が多いのが特徴である」と指摘されているものである。⁶² また同じくこの句訳出の点について、小島幸枝氏は「当時ヨーロッパではドチリナは童幼向けのキリスト教入門書であったため、しばしば歌わせたい。ドチリナの文体の特徴も、説明的

⁶² 松岡洸司前掲書、83頁。

で、『ゼズスとは、御扶け手と申す心也』(第1章)とか、『過ぎし事を思ひ出すメモウリヤの精』(第11章)などのように、文選読み式に、本語とその意味をセットにした短い訳文より成っている部分がある。一方、修徳書である『コンテムツスムンヂ』では、そうした知識と教養を土台として、説明抜きで文脈中に本語を用いている。また、原典の原語がラテン語(例 *caritas* 愛)であっても翻訳の用語としては、イエズス会の当時の公用語であったポルトガル語(例 *charidade* カリダアデ)で統一している⁶³としている。

確かに両氏の指摘される通りに、『コンテムツスムンヂ』における *Caritas* 系には一定の傾向が認められるが、今回、訳出結果からの逆引きによって判明するのは、その意味合いをどう汲み取っていたかということである。それが「善き大切」と「悪しき大切」と一覧において区分したものである。

少なくとも『コンテムツスムンヂ』における「大切」はその用語使用自体で神的な愛やキリスト教的愛徳そのものを表わしているわけではない。引用例を概観すればそれは明白である。そこでここでは「ご大切」、「デウスのご大切」、「深き大切」、「思ひ奉る」などを意味するものを「善き大切」とし、反対に「わが大切」、「ご作の物の大切」、「妄りなる大切」を「悪しき大切」として区別して考察してみたい。

まず *Amo* 系、*Diligo* 系の双方に言えることは、善悪いずれも含めて用いられているということである。またその頻度もどちらがより「善き大切」にあてはまるとも言えず、同様にどちらがより「悪しき大切」の傾向が強いともいえない。つまるところ、文脈に応じて「善き大切」、「悪しき大切」と訳出されているのであって、尊重されているのは文意である。「大切」それ自体には絶対的な価値観は伴っておらず、「何を大切」にするのかをきちんと整理して翻訳しているということが分かる。そして *Amo* 系であれ、*Diligo* 系であれ、その「善き大切」、「悪しき大切」をしっかりと読み分けた上で、

⁶³ 小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇』、武蔵野書院、2009年、204頁。ただし *Caritas* 系 = カリダアデと直訳されているわけではないことは、今回の分析から明らかである。

「大切」にはそのような方向と目的があることを示し、修徳書として読者を導こうとしている点も確認できる。それは別の用語、とりわけキリシタン版で多数見られる執心や執着、また愛着に置き換えず、「大切」にも「善き大切」と「悪しき大切」とがある事を語るものでもある。それはⅡ-7にある「このご大切の為に一方の大切を差し捨つべきこと肝用なり」(Oportet dilectum pro dilecto relinquere)において端的に表現されているものである。

一方 Caritas 系は一覧に見る通りに「善き大切」がほとんどである。「悪しき大切」に区分したⅠ-8も文脈からそのように受け取られるものの、実に微妙なところである。この点については巻三、巻四とも含めて検討する必要があると思われるので、ここでは判断を保留しておきたい。

3.3. 集中的使用例の分析

次に集中的に「大切」の訳出が見られる該当箇所を一定のまとまりとして取り出して、非訳出部分をも含めて検討してみたい。巻一、巻二にはいくつかのまとまった箇所があるが、比較検討にふさわしいと思われるⅡ-7を引用してみたい。

第七。 万事に越えてゼズキリシトを思ひ奉る大切のこと。

ゼズキリシトを大切に思ひ奉ることと、キリシトに対し奉りてわが身を卑しむる道を知る者は大果報なり。ゼズキリシトは万事に越えて思はれたく思召すによつて、このご大切の為に一方の大切を差し捨つべきこと肝用なり。ご作の物の大切は謀ることあり、変ることもあり、キリシトのご大切は二心なく届き給ふなり。ご作の物に頼る者はともに倒るべし。ゼズキリシトに抱き付き奉る輩はそれに終りなく据わり奉るべし。有る程の物よりは離さるるとも、遂に見捨て給はずして末にも亡びざるやうに抱へ給ふべき御主を大切に思ひ、親しみ奉れ。望むとも、望まずとも遂には人より捨てらるべきなり。生きても死しても御主ゼズキリシトに堅く縋り付き奉り、その御二心なきご内証に身を渡し奉れ。仮令諸人の合力は絶ゆるといふとも、この御主は力を

添へ給ふべし。汝の思ひ奉る御方は他事を交へず、只御一人のみ汝が心をご進退ありたくご作の物の妄りなる大切を払ひ除くるに於いては、ゼズキリシト快く汝とともに住し給ふべし。⁶⁴

Caput7.

De amore Jesu super omnia.

1. Beatus, qui intelligit, quid si amare Jesum: et contemnere seipsum propter Jesum.
2. Oportet dilectum pro dilecto relinquere, quia Jesus vult solus super omnia amari.
3. Dilectio creaturae fallax et instabilis: dilectio Jesu fidelis et perseverabilis.
4. Qui adhaeret creaturae, cadet cum labili: qui amplectitur Jesum, firmabitur in aevum.
5. Illum dilige et amicum tibi retine, qui omnibus recedentibus te non relinquet nec patietur in fine perire.
6. Ab omnibus oportet te aliquando separari, sive velis sive nolis.
7. Teneas te apud Jesum vivens ac moriens: et illius fidelitati te committe, qui omnibus deficientibus solus te potest juvare.
8. Dilectus tuus talis est naturae, ut alienum non velit admittere: sed solus vult cor tuum habere, et tamquam rex in proprio throno sedere.
9. Si scires te bene ab omni creatura evacuare, Jesus deberet libenter tecum habitare.⁶⁵

これによって「大切」の使用に関する用語の分散と共に、その文意をよく理解した訳出の特徴を見ることが出来る。Amo 系と Diligo 系は共に分散し、

⁶⁴ 校訂版65頁。

⁶⁵ ラテン語版560頁。

それぞれ文脈に基づいて「善き大切」、「悪しき大切」とされている。

ここで指摘しておきたいのは二箇所二重下線部分である。Ⅱ-7-2は本来ならば三回の「大切」が繰り返されてもよいところを、「思はれたく」として、用語の多様を避けている。ここでは文章の通りを円滑にするために、「大切」をよみ替えたと思われる。またⅡ-7-8は続く7-9と直結させて一文に翻訳しているために、同じように用語の多様が避けられたものであろうか。

いずれにしてもこの集中的使用例から明らかにされるのは、翻訳者の自由な語句の選択と語義の和らげによる読みやすさを心がけた翻訳姿勢と言える。

4. まとめ

以上のように、『コンテムツスムンヂ』巻一、二における「大切」について、その引用箇所の比較等から分析を試みた。巻三、四と全体を合わせて整理する必要があるため、ここでは中間結果を示すに過ぎないし、結果に応じては修正すべき点もあるかもしれない。

しかし少なくとも、「深い内容について十分に咀嚼して原著の意向を伝達していること」、また「自由な翻訳態度による読み替えの豊かさ」に加えて、深い宗教的修徳に関する知識と理解、更にはそれらの伝達への意欲と情熱、またそのための高い言語的能力が示されている事を読みとることができる。この『コンテムツスムンヂ』は印刷物となる以前から、著名なキリシタンだけでなく、多くの一般信徒に愛読されてきた。その点を含めて当時の日本人が極めて豊かな知的素養をもっていたことが分かる。更に言えばキリシタンが深い理性と洞察とをもって、この書を通してキリスト教信仰を受容していたといえる。

「善き大切」、「悪しき大切」、三系統の分散と訳出の特徴、また Caritas を巡る保留事項等を今後も分析の課題としていきたい。

(これは2013年3月2日、関西学院大学梅田キャンパスにて行われたキリス

『コンテムツスムンヂ』 卷一、二に見る「大切」(大島)

ト教史学会西日本部会での発表をもとに、加筆と訂正を加えたものである。))